

巢林子の略歴と著作

其一、略歴

姓を杉盛、名を信盛、通稱を平馬といひ、巢林子、不移山人、散人不移子、または平安堂と號し、作者名を近松門左衛門といふ。享應二年に生れり。出生地は古來語説あつて詳でない。竹豊故事には京都といひ、淨瑠璃譜には、出生は近江國高野郡近松坊にて、出家をきらひ京都に暮したといひ、南水漫遊、嬉遊笑覽、橋庵漫筆、卯花園塵録、葦笠雨談には、越前又は北越の産とし、一説に三州ともいふと見え、戲財録には、唐津の近松寺に遊學し、衆生化度の爲大悟還俗したといふ説が載つて居り、これから推測して唐津の生れといひ、或は唐津の近松寺で修行したものだともいひ、大田南畝の平安堂近松翁墓碣の文籍に、按翁本姓杉盛、諱信盛、字平馬、長門萩人と見え、聲曲類纂にも秋の生れといひ、増補和漢書畫一覽には、出雲國大原郡近松村の生れといひ、戲曲小説通志には、周防國山口の生れといひ、其他長門國大津郡深川村の産といひ、或は淀藩士の杉林家より出たものといひ、これ等の諸説何れも確確の證據なく、推測に過ぎぬ。私の考では、巢林子の全作品を通じて生確な方言彙が巧妙に運用され、上方氣韻がありありしてゐるので、近松は幼少より上方に育ち、竹豊故事にいへる如く、京都若しくは其の地方の産であると思ふ。家

略歴と著作

柄に就いては、彼が生前に書いたといふ辭世の文が傳はつてゐて、その中に「代代甲冑の家に生れながら武林を離れ」と見え、その辭世の文とても別種のものもあつて、さて近松が真にこれを實踐したであらうか、疑はれないでもないが、近松の作品を通じて、武士の精神が濃やかに表現されてゐるから、なるほど武士の家庭に育つたのであらうと首肯されないのでない。十九歳の頃、しら髪はななき山の跡かくし」の句を詠んで、山岡元郎編の寶藏追加に載り、二十四歳の頃、正親町従一位に仕へたといひ、或は阿野家の雜黨であつたともいふ。戯曲に筆をそめたのもこの頃である。二十五歳の時は、都萬太夫座の爲に、藤屋の怨毒が藤の花から大蛇に變する趣向を凝して掲揚し、三十四歳の時から竹本義太夫と提携し、義太夫の旗揚を祝して出世景清を作り、寶永六年(五十七歳)霜月名優坂田藤十郎の死より歌舞伎との縁薄くなり、享保九年霜月七十二歳で歿した。墓碑は攝津河邊郡久富村廣濟寺と大阪府町法妙寺と肥前唐津近松寺とにあつて、法名を阿彌陀院慶笑日一具足居士といふ。子あり多門といふ。要するに近松は願若にあつて、實踐にも心を傾はさず、淨瑠璃作者として刻苦練磨五十年間、その樂しみを改めなかつたといふの外、その傳は今は僅微として幾回多きを遺體とする。嗚呼この文豪や、襟度常に寛平で、天

下自ら險絶の人情なく、十惡を犯す罪の子にも人性の善をほのめかして、慈悲の眼に萬斛の涙を漉き、淪落な女にも情愛の極美を盡して、運命の拙きに泣く、彼が道徳觀によつて美化され詩化される、その感識は國學儒佛萬卷の書に亘つて渾然融和し、その體裁は國語の運用を極度に發揮し、俗耳に入り易うする爲には難雜な詞をも忌まず、衆生と共に生き共に住んで、清濁併せ呑むの雅懷を示し、分段同居の塵に交つて、人生の行路は至善と大悟に止まるを暗示するもの如く、吾人の琴線に觸れて、生命に共鳴し共感し歡喜する。偉なるかな巢林子や。人は死し時は過ぎ世は歴ても、彼の命毛長へに、不朽の生命を宿して不變の唄に、泡影の世から超越して、美の極致に誘ふのである。

其二、巢林子著作目次

- 淨瑠璃及歌舞伎狂言
- 1 瀧口横笛 刊年又は初上演年月 延寶四年十一月
 - 2 花山院后詩 延寶五年?
 - 3 念佛往生記 延寶六年?
 - 4 赤染衛門榮花物語 延寶八年一月 後年修訂して*大原問答普集巻と改題す
 - 5 鳥羽戀塚物語 天和元年以前 元祿十一年修訂して一心五戒魂と改題す
 - 6 徒然草 天和元年以前
 - 7 東山殿子日遊 天和元年一月
 - 8 世繼曾我 天和三年九月
 - 9 *以呂波物語 貞享元年三月?
- 百夜小町(本) 同 元年
- 10 夕霧七年忌(本) 同 元年
 - 11 大名なぐさみ曾我(本) 同 元年
 - 12 津戸三郎 同 初年?
 - 13 門出八島と大同小異 同 初年?
 - 14 凱陣八島 同 初年?
 - 15 千載集 同 二年?
 - 16 盛久 貞享二年?
 - 17 *出世景清 後年修訂して圭馬判官盛久と改題す 同 三年二月
 - 18 *三世相 夕霧三世相ともいふ 同 三年五月
 - 19 佐佐木先陣 題發云、 同 三年七月 佐佐木大盛
 - 20 今源氏六十帖(本) 元祿元年一月
 - 21 *本朝用文章 同 初年?
 - 22 *天智天皇 同 二年三月
 - 23 忠臣身替物語 題發云、今 同 二年 樺かきは木 八月
 - 24 烏帽子折 元祿二年一月 折と改題す *源氏烏帽子
 - 25 水木辰之助錢振舞(本) 同 三年 年春
 - 26 *十二段 同 三年秋 元祿十四年九月源氏十二段長生鳥籠と改題す
 - 27 *大覺大僧正御傳記 同 四年十月 女人即身成佛記を修訂せるもの

- 26 *日本西王母 同 五年秋
南大門秋彼岸と大同小異
- 29 佛母摩耶山開帳(本) 同 六年
三月?
- 30 *松風村雨束帶鑑 同 七年?
- 31 *融大臣 同 七年八月?
- 32 *釋迦如來誕生會 同 八年四月
- 33 *鎌田兵衛名所盃 同 八年十月
- 34 傾城阿波鳴門(本) 同 八年?
- 35 曾我七以呂波 源云、義同 九年
經追善女齋 九月?
- 36 *頼朝伊豆日記 同 十年七月
- 37 *百日曾我 同 十年十月
團圓曾我の修訂
- 38 *當流小栗判官 元祿十一年二月
- 39 傾城江戸櫻(本) 同 十一年二月
- 40 一心二河白道(本) 同 十一年三月
- 41 傾城佛が原(本) 同 十二年一月
- 42 阿彌陀池新寺町(本) 同 十二年秋
- 43 根元曾我 不詳
- 44 *今川了俊 不詳
- 45 姫藏大黒柱(本) 元祿十二年十一月
- 46 *浦島年代記 同 十三年一月?
- 47 *天鼓 元祿十四年春
- 48 傾城富士見る里(本) 同 十四年春
- 49 *蟬丸 同 十四年五月

- 50 *大掛物十幅一對 同 十四年九月
種義北園落の修訂
- 51 *曾我五人兄弟 同 十四年十一月
- 52 傾城壬生大念佛(本) 同 十五年春
- 53 *大磯虎稚物語 同 十五年五月?
- 54 *賀古教信七墓廻 同 十五年七月
- 55 傾城若紫(本) 同 十五年?
- 56 *最明寺殿百人上臈 同 十六年春
- 57 傾城三つ車(本) 同 十六年春
- 58 *曾根崎心中 同 十六年五月
- 59 辛崎八景屏風(本) 同 十六年秋?
- 60 *薩摩歌 寶永元年一月
- 61 吉祥天女安産玉(本) 同 元年秋
- 62 *雪女五枚羽子板 同 二年春
- 63 *用明天皇職人鑑 同 二年十一月
- 64 *源義經將菜經 同 三年一月
- 65 *田村將軍初觀音 同 三年春
- 66 *本領曾我 同 三年三月
- 67 *心中二枚繪草紙 同 三年三月
- 68 *加増曾我 同 三年夏
- 69 *兼好法師物見車 同 三年五月
- 70 *基盤太平記 同 三年六月
- 71 *卯月の紅葉 同 三年夏
- 72 *曾我扇八景 同 三年七月

- 73 *吉野忠信 同 四年一月
- 74 *堀川波鼓 同 四年二月
京都で上演の時「堀江川波鼓」と改題す
- 75 *卯月の潤色 同 四年夏
- 76 *酒吞童子枕言葉 同 四年九月
第三段以下を修訂し、*傾城酒吞童子と改題して享保三年上演す
- 77 *心中重井筒
お房徳兵衛の情は寶永四年十二月十六日未明なるにより、この初上演は寶永五年春なるべし。
- 78 *傾城反魂香 同 五年春
- 79 *心中萬年草 同 五年四月
- 80 *丹波與作侍夜の小室節 同 五年
正徳二年再演の時丹波與作と改題す
- 81 *淀鯉出世瀧徳 同 五年末?
- 82 傾城金龍橋(本) 同 五年十一月?
- 83 *五十年忌記念佛 同 六年一月
- 84 御曹司初寅詣(本) 同 六年一月
- 85 *心中双は水の朝日 同 六年六月
- 86 *穂狩剣本地 同 六年九月
- 87 *曾我虎が磨 同 七年一月
- 88 *今宮心中 同 七年春
- 89 *百合若大臣野守鏡 同 七年一月
- 90 *孕常盤 同 七年八月
- 91 *源氏冷泉節 同 七年秋

- 92 *冥途の飛脚 正徳元年三月
- 93 *吉野都女楠 同 元年九月
- 94 *大職冠 同 元年冬?
- 95 *夕霧阿波鳴渡 同 二年春
- 96 *傾城懸物捕 同 二年三月
- 97 *弘徽殿鶉羽産家 同 二年五月
花山院后諱の改作。
- 98 *嬬山姥 同 二年七月
- 99 長町女腹切 同 二年秋
- 100 *傾城吉岡染 同 二年十一月
- 101 *天神記 同 三年二月
- 102 *燦靜胎内拵 同 三年五月
- 103 *相模入道千足大 同 四年四月
- 104 *娘歌かるた 同 四年八月
- 105 *嵯峨天皇甘露雨 同 四年十月
- 106 *大經師昔曆 同 五年一月
後年改題して戀八卦柱懸といふ
- 107 *持統天皇歌軍法 同 五年八月
- 108 *生玉心中 同 五年八月
- 109 *國性爺合戦 同 五年十一月
- 110 *國性爺後日合戦 享保二年二月
- 111 *鐘の權三重帷子 同 二年八月
- 112 *聖徳太子繪傳記 同 二年十一月
- 113 山崎與次兵衛壽の門松 同 三年一月

- 114 *日本振袖始 同 三年二月
 - 115 同(狂言) 同 三年夏?
 - 116 *曾我會稽山 同 三年七月
 - 117 *博多小女郎波枕 同 三年十一月
 - 118 *本朝三國志 同 四年二月
 - 119 *平家女護島 同 四年八月
 - 120 *傾城島原蛙合戦 同 四年十一月
 - 121 *井筒業平河内通 同 五年三月
 - 122 *雙生隅田川 同 五年八月
 - 123 *日本武尊吾妻鑑 同 五年十一月
 - 124 *心中天の網島 同 五年十二月
 - 125 *津國女夫池 同 六年二月
後年改題して室町千疊敷といふ
 - 126 津國女夫池(本) 同 六年春
 - 127 *女殺油地獄 同 六年七月
 - 128 *信州川中島合戦 同 六年八月
 - 129 *唐船嘶今國性翁 同 七年一月
 - 130 *心中宵庚申 同 七年四月
 - 131 *關八州繫馬 同 九年一月
- 以上*を附したのは義太夫正本。其の他筑後津追善の爲に、彼の略歴や語り物の外題兼しを作り込んだ「音曲百枚笹」(正徳四年十月上演)の短篇がある。
- これ等の他に巢林子の作であらうと疑はれるものに、江州石山寺源氏供養、舍利、三社託宣、助六心中姫のゆげがら、牛若千人斬、妻

の上、藤染川、惟喬惟仁位尊、十六夜物語、平安城、龜谷物語、京わらんべ、以上延寶、天和頃の作、甲子築、賢女手習并新編、源三位頼政(扇の芝)、頼朝遺出、巴太鼓、大原御幸、僧源源氏木曾物語、辨慶京土産、花洛受法記、自然居士、柏崎、都の富士、ひら假名太平記、弱法師、多田院開帳、佐藤忠信二十日正月、當麻中將姫、義經東六法、傾城淺間殿、文武五人男、信田小太郎、あがらの平太、甲賀三郎、以上貞享頃より寶永初年までの作)などがあり、また門左衛門添削のものに、蒲殿達(元祿頃)、善光寺御堂供養(享保二年)、右大将鎌倉實記(享保九年)などがある。他にまだ珍書愛蔵者の筐底に秘めて、目新しい近松ものがあるであらうが、私が今までに知り得たものはこれだけである。

巢林子時代略年表及附記

巢林子時代略年表

巢林子時代は清新の風に満ちた語道の名匠を驅使して、我が文壇を飾れる百花爛漫の世であつた。殊に京阪地方では散文學書刊行も多し、これ等は巢林子生存中に於ける世相文化を知る參考となれば、その概略表を附記して置いた。

承應二年

後光明天皇御宇

將軍徳川家綱

「つるぎのまき」

「愛宕地蔵之物語」

の丹祿本出づ

巢林子生る

俳風書生

畫一(一歳二歳)

師英(一歳二歳)

音曲竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

師 竹本義太夫(三歳)

徳川光圀(二十六歳)

徳川光圀(二十六歳)

徳川光圀(二十六歳)

徳川光圀(二十六歳)

徳川光圀(二十六歳)

明應三

後西天皇御宇

江戸大火

「誰が身の止出づ」

萬治元

江戸大火

「東海道名所記出づ」

萬治三

「ゆきをんな物語」

出づ

萬治元

「をくら物語」出づ

寛文三

豊元天皇御宇

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

巢林子(十一歳)

徳伊藤仁齋(二十七歳)

國學下河邊長流(三十歳)

著 木下順庵(三十三歳)

著 西山宗因(四十九歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

著 北村季吟(五十三歳)

國史館を置き本朝

通鑑を續修す

「一人比五尼」戒

毀物語(糸竹初心

集)出づ

寛文五

巢林子(十三歳)

小説 西澤與志生

寛文六

「伽婢子」出づ

巢林子(十四歳)

儒 茨生祖傑生

寛文七

「背葉の笛の物語」

出づ

巢林子(十五歳)

小説 江戸屋其成生

寛文一〇

「本朝通鑑」成る

「判官都ばなし」出

者 伊藤東涯生

國學 荷田春滿生

寛文一二

巢林子(二十歳)

俳山岡元隣歿す

石川丈山歿す

延寶二

西鶴住吉社頭に俳

句二萬吟を詠す

「枕草紙春曙抄」出

師 狩野探幽歿す

延寶四

「萬葉集代匠記」成る

巢林子(二十四歳)

延寶五

山本角木土佐様

を受領し宇治縣

大夫加賀豫を受領

者 儒 祇園南海生

巢林子(二十五歳)

巢林子(二十五歳)

赤本「初春のいわ

び」出づ、「色道大

鏡」成る

師 西川祐信生

延寶八

徳川綱吉將軍とな

り内大臣に任ず

「本朝書史成る」

著 太宰春臺生

天和二

「さんげ物語」出づ

巢林子(三十歳)

西山宗因歿す

者 山崎闇齋歿す

者 朱舜水歿す

天和三

巢林子(三十一歳)

儒 服部南郭生

貞享三

西鶴の好色本流行

す 蕉正風體を創作

す 巢林子が義太夫の

爲に「出世景清」を

作る

「古今百物語評判」

「薄雲物語」出づ

元祿元

東山天皇御宇

音曲江戸半太夫節

の名この頃最も高

し

「四書南解」新刻成る

元祿四

將軍綱吉湯島聖堂

に臨み講義を行ふ

林信篤大學頭とな

能優水木辰之助京

に入る

巢林子(三十九歳)

熊澤蕃山歿す

淺井了意歿す

「猿蓑集」成る
元祿六
「雨夜三盃機杼」
「野郎評判」出づ
元祿七
「炭俵」風流源氏
出づ
元祿一
「水滸傳」成る
元祿一四
「折焚く柴の記」成る
元祿一六
「河内國琴が火」
「讀史餘論」成る
正徳四
將軍徳川家繼
正徳五
「大日本史」成る
享保元
將軍徳川吉宗
享保九
大坂大火
英一蝶屋
尾形光琳屋
坂田藤十郎屋
巢林子(七十二歳)
巢林子(六十三歳)
巢林子(六十四歳)
巢林子(六十二歳)
巢林子(四十八歳)
徳川光圀院
巢林子(四十九歳)
釋契沖屋
巢林子(五十一歳)
釋淨嚴屋
巢林子(五十二歳)
市川團十郎(初代)屋
巢林子(五十三歳)
伊藤仁齋屋
北村季吟屋
巢林子(五十四歳)
荷田在滿屋
戸田茂睡屋

寶永二
竹本義太夫が竹本座主を竹田出雲に
「風流文選」出づ
「若縁」出づ
寶永三
巢林子(五十五歳)
富士山噴火して寶永山を生ず
永山を生ず
巢林子(五十九歳)
中御門天皇桐宇
將軍徳川家宣
宇治加賀屋
巢林子(六十一歳)
巢林子(六十二歳)
巢林子(六十三歳)
巢林子(六十四歳)
巢林子(六十二歳)
竹本筑後屋
貝原益軒屋
巢林子(六十二歳)
巢林子(六十三歳)
巢林子(六十四歳)
巢林子(六十二歳)
巢林子(六十三歳)
巢林子(六十四歳)

寶永四
富士山噴火して寶永山を生ず
永山を生ず
巢林子(五十五歳)
巢林子(五十九歳)
中御門天皇桐宇
將軍徳川家宣
宇治加賀屋
巢林子(六十一歳)
巢林子(六十二歳)
巢林子(六十三歳)
巢林子(六十四歳)
巢林子(六十二歳)
竹本筑後屋
貝原益軒屋
巢林子(六十二歳)
巢林子(六十三歳)
巢林子(六十四歳)
巢林子(六十二歳)
巢林子(六十三歳)
巢林子(六十四歳)

寶永五
「大日本史」成る
享保元
將軍徳川吉宗
享保九
大坂大火
英一蝶屋
尾形光琳屋
坂田藤十郎屋
巢林子(七十二歳)
巢林子(六十三歳)
巢林子(六十四歳)
巢林子(六十二歳)
巢林子(六十三歳)
巢林子(六十四歳)

寶永六
「風流文選」出づ
「若縁」出づ
寶永三
巢林子(五十四歳)
荷田在滿屋
戸田茂睡屋

寶永七
竹本義太夫が竹本座主を竹田出雲に
「風流文選」出づ
「若縁」出づ
寶永三
巢林子(五十四歳)
荷田在滿屋
戸田茂睡屋

寶永八
竹本義太夫が竹本座主を竹田出雲に
「風流文選」出づ
「若縁」出づ
寶永三
巢林子(五十四歳)
荷田在滿屋
戸田茂睡屋

寶永九
竹本義太夫が竹本座主を竹田出雲に
「風流文選」出づ
「若縁」出づ
寶永三
巢林子(五十四歳)
荷田在滿屋
戸田茂睡屋

寶永一〇
竹本義太夫が竹本座主を竹田出雲に
「風流文選」出づ
「若縁」出づ
寶永三
巢林子(五十四歳)
荷田在滿屋
戸田茂睡屋

寶永一一
竹本義太夫が竹本座主を竹田出雲に
「風流文選」出づ
「若縁」出づ
寶永三
巢林子(五十四歳)
荷田在滿屋
戸田茂睡屋

寶永一二
竹本義太夫が竹本座主を竹田出雲に
「風流文選」出づ
「若縁」出づ
寶永三
巢林子(五十四歳)
荷田在滿屋
戸田茂睡屋

寶永一三
竹本義太夫が竹本座主を竹田出雲に
「風流文選」出づ
「若縁」出づ
寶永三
巢林子(五十四歳)
荷田在滿屋
戸田茂睡屋

附記

附記(既略)

桃源集 明徳元年刊 二巻
まさり草 龍光庵月居士撰 明徳二年刊 二巻
催情記 明徳三年刊 一冊
ねごと草 寛文二年刊 二巻二冊
糸竹初心集 中村宗三編 京都 寛文四年刊 三巻

たきつけ草上 もえくゑの中
み下 泉州辨住人撰 延寶五年刊
色道那爾葉鉦 西水庵無底居士撰 延寶
諸分七巻 八巻刊 六巻 七巻 八巻
元祿七年に「好色櫻葉鹿子」と改題し、後
更に諸分店風と改題す。

色道大鏡 山田箕山撰 延寶年中成(寫
本)
古今若女郎衆序 天和元年刊
好色一代男 井原西鶴撰 大坂 天和二
年刊 八巻あり。

「やまと繪の根元」 菱川師宣畫 江戸
本ふうぞく繪 二巻
當世戀慕水鏡 山八撰 天和二年刊 五
巻
新御伽婢子 天和二年刊 六巻
小夜衣 茅屋子撰 天和三年刊 五巻
風流嵯峨紅葉 山八撰 天和三年刊
吉原の草紙 蓮之撰 天和三年刊
下り竹齋 天和三年刊 三巻

花の名残 江戸、京都、貞享元年刊 五巻
好色三諸艶大鑑 井原西鶴撰 江戸、貞
享元年刊 八巻
宗祇諸國物語 貞享二年刊 五巻
好色増鏡 貞享二年刊 四巻
大幣 貞享二年刊

梶久一世物語 井原西鶴撰? 貞享二
年刊 二巻
諸國はなし (一名、大下馬) 井原西鶴
撰 貞享二年刊 四巻
近代艶隠者 井原西鶴撰 大坂 貞享三
年刊 五巻
好色三代男 京都、貞享三年刊 五巻
好色江戸紫 石川流宣撰 貞享三年刊

本朝二十不孝 (一名、新因果物語) 井
原西鶴撰 大坂 貞享
三年刊 五巻
古今百物語評判 貞享三年刊 五巻
好色一代女 井原西鶴撰 大坂 貞享三
年刊 六巻
好色五人女 井原西鶴撰 大坂 貞享三
年刊 五巻
後摺に「新被給入當世女容氣」と改題
す。

好色訓蒙圖彙 吉田半兵衛撰 貞享三年
刊 三巻
好色伊勢物語 (後) 貞享三年刊
好色諸國心中女 (後) 貞享三年刊 五巻
好色旅日記 京都、貞享四年刊 五巻
男色大鑑 (一名、本朝若風俗) 井原西
鶴撰 大坂、貞享四年刊 八巻
諸國武道傳來記 井原西鶴撰 江戸、貞
享四年刊 八巻
色の染衣 松月堂不角撰 貞享四年刊
好色破邪顯正 白服居士撰 貞享四年
刊 三巻
好色貝合 (好色訓蒙圖彙後編) 吉田半
兵衛撰 貞享四年刊 二巻
男色十寸鏡 好善居士序 貞享四年刊
二巻
懷硯 井原西鶴撰 貞享四年刊 五巻
(吉原五十四君 東國太郎(其角)撰)
新竹齋 京都、貞享四年刊 五巻
(梅のかほり) 夢遊軒序、菱川師宣畫
貞享四年刊 四巻
好色年八卦 江戸、貞享四年刊 四巻
元祿五年に「三陽鏡」と改題し、又後に
「傾城文反古」と改題す。

好色四季はなし 井原西鶴撰? 貞享年
刊 四巻
元祿六年に「浮世榮花一代男」、元祿十
一年に「好色堪忍記」、正徳三年に「浮世花

鳥風月」と改題す。(また後年「好色四季
咄」として無名撰、京都出水通大官西へ
入ル町和泉屋三郎兵衛板行、四巻ある別
種の好色本あり。

好色しなの梅 貞享年中刊 四巻

諸國色里案内 空也軒一夢撰 貞享年中
刊三巻

武家義理物語 井原西鶴撰 元祿元年刊
三巻

貧人太平記 元祿元年刊 三巻

入正月揃 北條園水撰？ 京都 元祿元年
刊六巻

色里三所世帯 元祿元年刊 三巻

日本永代蔵 井原西鶴撰 大坂 元祿元
年刊六巻

新可笑記 井原西鶴撰 大坂 元祿元年
刊五巻

好色盛衰記 井原西鶴撰 元祿元年刊
五巻

元祿十四年に「西醫祭花咄」と改題す。

好色注能毒 元祿元年刊 三巻

好色通變占 元祿元年刊 三巻

本朝櫻陰比事 井原西鶴撰 大坂 元祿
二年刊五巻

好色床講義 元祿二年刊 六巻

好色法のともしぶな 磯貝捨吾撰 元祿
二年刊五巻

新吉つれつれ草 井原西鶴撰？ 大坂
元祿二年刊二巻

眞實伊勢物語 京都 元祿三年刊三巻

好色染した地 松尾雪序 元祿四年刊
五巻

日本好色名所鑑 (續表、日本名所好色
大鑑) 藤木盛庸撰
京都 元祿五年刊
五巻

好色錦木 元祿五年刊 五巻

世胸算用 井原西鶴撰 大坂 元祿五年刊
五巻

狗張子 淺井了意撰 元祿五年刊 七巻

諸國百物語 伴林子撰 元祿五年刊 五
巻
九思軒長撰 元祿六年
刊五巻

當流男色子鑑 刊五巻

延享三年に「和國小性實質」と改題す。

西鶴置土産 井原西鶴撰 京都 元祿六
年刊五巻

元祿七年江府書林志村孫七開板(西鶴
ひがんさく難)五巻五冊は西鶴の肖像な
ど少し改めたる外同版なり。

好色萬金丹 大坂 元祿七年刊 五巻

西鶴織留 (本町町人がかみ) 井原西鶴
撰 京都 元祿七年刊六巻

好色慰草 (二名、好色手打笑、また好色
名物撰と云) 元祿七年刊五巻

(好色赤烏帽子 桃林堂撰 江戶)
九思軒長撰 元祿八年刊
三巻

香のかほり 全衣軒撰 京都 元祿八
年刊

好色十二人男 全衣軒撰 京都 元祿八
年刊

俗徒然 井原西鶴撰 京都 元祿八年刊
五巻

忘花 如醉撰 京都 元祿九年刊 五巻

好色小柴垣 醉狂庵撰 元祿九年刊 五
巻

好色さんげ咄 元祿九年刊 五巻

(好色艶虚無僧 桃の林撰 江戶)
元祿九年刊 五巻

萬の文反古 井原西鶴撰 京都 元祿九
年刊五巻

(玉箒子 林義編撰 江戶 元祿九)
年刊

林義端には「武家堪忍記」の作もあると
云ふ。

古今武士鑑 難波一雪撰 京都、大阪
元祿九年刊 五巻

好色酒呑童子 (後に好色染花女と云)
元祿十年刊 五巻

賢女明野の夢 沈水撰 元祿十年刊 二
巻

西鶴冥途物語 泡影撰 元祿十年刊
五巻

(好色大福帳 桃の林紫石撰 江戶)
元祿十年刊 五巻

好色飛鳥川 元祿十年刊 五巻

(ぞくむらさき 石川流宣撰 江戶)
元祿十一年刊 五巻

新色五巻書 西澤與志撰 大坂 元祿十
一年刊 五巻

小夜風物語 元祿十一年刊 十巻

籠耳 元祿十一年刊 五巻

好色井戸車 (後に新原かみと云) 元
祿十二年刊 五巻

好色文傳授 由之軒政房撰 京都 元祿
十二年刊 五巻

西鶴名残之友 北條園水序 元祿十二
年刊 五巻

好色川念佛 如水軒撰 京都(書林木村
氏)元祿十四年刊 五巻

好色百物語 櫻花軒撰 元祿十四年刊
五巻

傾城色三味線 八文字屋自笑撰 元祿十
四年刊 五巻

寛潤曾我物語 大坂 元祿十四年刊 十
二巻

御前伽婢子 都の錦撰 元祿十四年刊
六巻

女大名丹前能 西澤與志撰 元祿十五年
刊八巻

遊里櫻太鼓 西澤與志撰 元祿十五年刊
六巻

風流神代巻 都の錦撰 大坂 元祿十五
年刊 六巻

五箇の津餘情男 都の花風撰 京都 元
祿十五年刊 三巻

清少納言大如 如水軒撰 元祿十五年刊 三巻

都女品定 如木軒撰 元祿十五年刊 五巻

好色智恵袋 元祿十五年刊 五巻

風流大和莊子 都の錦撰 元祿十五年刊
五巻

諸藝太平記 (巻頭、元祿太平記) 都の
錦撰 京都 元祿十五年刊
八巻

東海道敵討 都の錦撰 京都 元祿十五
年刊 六巻

風流好色十二段 元祿十五年刊 六巻

沖津白波 都の錦撰 京都、大阪 元祿
十五年刊 五巻

好色大振袖 好色軒園水撰 元祿十六年
刊 五巻

遊新平家物語 一雙子撰 元祿十六年刊
八巻

傾城仕送大臣 京都 元祿十六年刊 六
巻

風流今平家 西澤與志撰 大坂 元祿十
六年刊 十巻

風流夢浮橋 雨齋庵松林撰 大坂 元祿
十六年刊 六巻

風流敗毒散 大坂 元祿十六年刊 五巻

風流源氏物語 都の錦撰 元祿十六年刊
六巻

男色木目漬 淺屋蘭齋自然坊撰 元祿十
六年刊 六巻

松の葉 秀松軒撰 京都 元祿十六年刊
七巻

立身大福帳 唯樂軒撰 京都 元祿十六
年刊 七巻

(好色江戸むらさき 江戶 元祿年)
中刊 三巻

(好色若えびす 鳥居清徳撰 江戶)
元祿年中刊 三巻

好色錦木 元祿年中刊

諸國此好色覺帳 京都 元祿年中刊
四巻

(好色蒲萬歳 桃の林紫石撰 江戶)
元祿年中刊 五巻

好色産毛 雲風子林鴻 京都
元祿年中刊 五巻

吉原語わけ姥さくら 元祿年中刊？
新刊

拾遺御伽婢子 柳絲堂撰 寶永元年刊
七巻

忠孝永代記 森木東鳥撰 寶永元年刊
八巻

風流連三味線 風音堂撰 寶永元年刊
五巻

誰袖の海 由之軒政房撰 寶永元年刊
六巻

落葉集 (題表、松の落葉) 大木國編
京都 寶永元年刊 七巻

好色夕顔利生草 寶永元年刊 五卷
 心中大鑑 書方軒撰 京都 寶永元年刊 五卷
 筆の初染 今西鶴撰 寶永二年刊 五卷
 傾城武道樓 西澤與志撰 京都 寶永二年刊 五卷
 業大門屋舖 錦文流撰 大坂 寶永二年刊 五卷
 風流今兼好 錦文流撰 寶永二年刊 五卷
 (御伽人形 苗村松軒撰 江戸 寶永二年刊 五卷)
 寶永千歲記 田村榮秀撰 京都 寶永二年刊 五卷
 御前獨狂言 西鷹撰 寶永二年刊 五卷
 傾城太神樂 大坂 寶永二年刊 六卷
 好色萬金丹 (元祿七年刊)の繕直し。 福富言高撰 寶永二年刊 六卷
 長者機嫌袋 桃の林紫石撰 江戸 寶永二年刊 五卷
 (風武道色八景 西樂撰 京都 寶永三年刊 五卷)
 世の是沙汰 錦文流撰 大坂 寶永三年刊 七卷
 當世乙女織 西澤與志撰 寶永三年刊 六卷
 新色三つ巴 錦文流撰 江戸等 寶永三年刊 五卷
 熊谷女編笠 白梅園青木鶴水撰 江戸 寶永三年刊 六卷
 (御伽百物語 森本東島撰 京都 寶永三年刊 四卷)
 京縫鎖帷子 舟月撰 寶永三年刊 五卷
 うちかぶと 北條園水撰 京都等 寶永三年刊 六卷
 新武道傳來記 森田吟夕撰 京都 寶永三年刊 八卷
 宇津山小蝶物語 若緑 寶永三年刊 五卷
 若緑 寶永三年刊 五卷
 本朝濱千鳥 永井止流撰 京都 寶永四年刊 六卷
 (男色比翼鳥 東の紙子撰 奥村政信撰 江戸 寶永四年刊 六卷)

晝夜用心記 北條園水撰 京都 寶永四年刊 六卷
 伊達髮五人男 西澤與志撰 京都 寶永四年刊 五卷
 千尋日本振 圓柳撰 寶永四年刊 六卷
 傾城播磨石 京都 寶永四年刊 六卷
 (風流吳竹男 飯山錦雲撰 江戸 寶永五年刊 五卷)
 野傾友三味線 西澤與志撰 寶永五年刊 五卷
 茶傾腹立顔 西澤與志撰 大坂 寶永五年刊 三卷
 好色手柄咄 錦文流撰 寶永五年刊 五卷
 美景蒔繪松 市軒撰 寶永五年刊 五卷
 傾城伽羅三味線 西澤與志撰 寶永五年刊 五卷
 鎌倉比事 月尋堂撰 京都 寶永五年刊 六卷
 夏保三年七再捲
 (本朝新堪忍記 青木鶴水撰 寶永五年刊 七卷)
 (關東名残の袂 忍岡やつかれ撰 江戸 寶永五年刊 五卷)
 (風遊貴の衣司香 江月 寶永五年刊 五卷)
 今様二十四孝 月尋堂撰 寶永六年刊 六卷
 當世誰が身の上 斧丸撰 寶永六年刊 六卷
 本朝諸士百家記 錦文流撰 大坂 江戸 寶永六年刊 一〇卷
 風流御前二代會我 西澤與志撰 寶永六年刊 六卷
 子孫大黒柱 月尋堂撰 江戸等 寶永六年刊 六卷
 本朝桃陰比事 寶永六年刊 七卷
 傾城玉子酒 八文字屋自笑撰 寶永六年刊 八卷
 西鶴筆の初染 寶永六年刊 八卷
 兄弟善惡事 月尋堂撰 寶永六年刊 六卷

(風流鏡が池 江戸 寶永六年刊) 八文字屋自笑撰 京都 寶永七年刊 六卷
 風流曲三味線 寶永七年刊 六卷
 寬湖平家物語 八文字屋自笑撰 京都 寶永七年刊 六卷
 野白内證鑑 八文字屋自笑撰 京都 寶永七年刊 五卷
 傾城波みやげ 寶永七年刊 五卷
 男色今鑑(風流金魚袋) 寶永七年刊 五卷
 傾城傳授紙子 八文字屋自笑撰 京都 寶永七年刊 五卷
 増松の落葉 大木扇徳編 京都 寶永七年刊 六卷
 御入部伽羅女 瓶水序 寶永七年刊 六卷
 忠義太平記 京都 寶永八年刊 六卷
 新好色文枕 醉言軒義蛇堂撰 寶永八年刊 五卷
 傾城禁短氣 八文字屋自笑撰 江戸 寶永八年刊 五卷
 魂膽色遊懷男 西澤與志撰 刊年未詳 三卷
 衆道戀慕櫻 西澤與志撰 刊年未詳 三卷
 (高名太平記 青木鶴水撰 刊年未詳 五卷)
 野傾百物語 西澤與志撰 刊年未詳 五卷
 男傾城文枕 西澤與志撰 刊年未詳 五卷
 好色入子枕 正徳元年刊 五卷
 御前義經記 西澤與志撰 大坂 正徳二年刊 八卷
 一夜船 北條園水撰 大坂 正徳二年刊 五卷
 文武ざざれ石 石別子撰 大坂 正徳二年刊 五卷
 當世智惠鏡 林義淵撰 正徳二年刊 五卷
 傾城益軍談 八文字屋自笑撰 正徳三年刊 五卷

日本新永代藏 (一名、近世長者鑑) 北條園水撰 大坂 正徳三年刊 六卷
 本朝智惠鑑 北條園水撰 京都 正徳三年刊 六卷
 百姓盛衰記 八文字屋自笑撰 正徳三年刊 四卷
 金屋色町寄 松月堂桃雨撰 京都 正徳三年刊 六卷
 當世信安記 落月堂撰 正徳三年刊 五卷
 今川一睡記前編 八文字屋自笑撰 京都 正徳三年刊 五卷
 本朝二十四貞 (一名、本朝女二十四孝) 正徳三年刊 五卷
 商人職人懐日記 大坂 正徳三年刊 五卷
 手代神算鑑 正徳三年刊 五卷
 西海太平記 八文字屋自笑撰 京都 正徳三年刊 五卷
 近代長者鑑 落月堂撰 京都 正徳四年刊 五卷
 都ひながた 江島屋其誠撰 京都 正徳四年刊 三卷
 四民乗合船 紀海善撰 大坂 正徳四年刊 四卷
 國家諸士鑑 雲齋散人撰 京都 正徳四年刊 六卷
 女男伊勢風流 八文字屋自笑撰 京都 正徳四年刊 三卷
 風枝の巻 正徳四年刊 二卷
 敷疊百八十壘 江島屋其誠撰 正徳四年刊 三卷
 世間息子氣質 江島屋其誠撰 京都 正徳五年刊 五卷
 義經風流鑑 八文字屋自笑撰 京都 正徳五年刊 五卷
 風流訛平家 八文字屋自笑撰 京都 正徳五年刊 五卷
 新小夜嵐 (書名、腕久二世物語) 正徳五年刊 二卷
 艶道通鑑 増穂磯口撰 正徳五年刊 八卷
 野傾旅葛籠 八文字屋自笑撰、江島屋其誠撰 京都 正徳五年刊 五卷

- 愛樂毬八代物語 森田吟夕撰 京都 正徳五年刊 四卷
- 世上智恵袋 正徳頃刊? 三卷
- 今源氏空船 西選與志撰 享保元年刊 五卷
- 西鶴傳授車 天狗堂轉選撰 京都 享保元年刊 五卷
- 續小夜嵐 刊年未詳 六卷
- (武道繼穂の梅 石川流宣撰 江戸) 刊年未詳 五卷
- 契情あやめ草 享保元年刊 五卷
- 分里艶行脚 八文字屋自笑撰 京都 享保元年刊 五卷
- 當世名代男 江島屋其儀撰 京都 享保元年刊 五卷
- 浮世親仁形氣 江島屋其儀、八文字屋自笑撰 京都 享保元年刊 五卷
- 世間娘氣質 江島屋其儀撰 京都 享保元年刊 六卷
- 風傾性野群談 八文字屋自笑撰 京都 享保二年刊 五卷
- 忠義太平記大全 吉川登信撰 京都 享保二年刊 十二卷
- 和漢遊女容氣 江島屋其儀撰 京都 享保二年刊 五卷
- 國性爺明朝太平記 江島屋其儀撰 享保二年刊 六卷
- 野傾咲分色存 八文字屋自笑撰 享保二年刊 五卷
- 野傾髮透油 八文字屋自笑撰 京都 享保二年刊 五卷
- 諸國武道容氣 享保二年刊
- 女敵討高麗茶碗 享保二年刊 三卷
- 雲州松江の鱸 享保二年刊? 三卷
- 猿原氏色芝居 九思軒鱸長撰 享保三年刊 六卷
- 寛瀨大臣氣質 刊 五卷 京都 享保三年刊 五卷
- 諸士興廢記 九思軒鱸長撰 享保三年刊 八卷

- けいせい新色三味線 其録撰 享保三年刊 六卷
 - 亂脛三本鏡 西選與志撰 享保三年刊 五卷
 - 後室色縮緬 (一)代色縮緬百人後家) 西選與志撰 京都 享保三年刊 五卷
 - (序云、後家とは真婦の類なるが、後には真婦姿の私娼をいひ、これに狂ふを後家狂ひといふ。)
 - 傾城籠昭君 八文字屋自笑撰 京都 享保三年刊 五卷
 - 町人袋 西川忠英撰 享保四年刊 七卷
 - 役者色仕組 八文字屋自笑、江島屋其儀撰 京都 享保五年刊 六卷
 - 徒然時勢粧 錦文流撰 大坂 享保六年刊 七卷
 - 薄紅葉 享保七年刊 五卷
 - 手代袖算盤 八文字屋自笑撰 享保七年刊 五卷
 - 商人家職訓 江島屋其儀撰 京都 享保七年刊 五卷
 - 櫻會我女時宗 江島屋其儀、八文字屋自笑撰 京都 享保八年刊 五卷
 - 風流七小町 八文字屋自笑撰 京都 享保八年刊 五卷
- 以上は巢林子在世中のものである。近松研究に纏の薄き江戸物には(一)を附した。

近松研究資料

近松を徹底的に研究するには古正本に據らねばならぬことは申すまでもないが、その中には稀報書も尠くなく、且古風の平假名で書き續けてあつて、通讀しにくい上に難語難句の多い爲、讀者の便を計つて假名遣を直し漢字を宛てはめて讀本とし、又は註釋を施し先人の努力になれる研究資料刊行を目次に列記する。

- 浄瑠璃難波土産 櫻澤以實撰 元文三 文句註 大阪 五卷五册
- 上田萬年校定本、水谷弓彦校定本等あり。
- 近松物ではお初天神記・國性爺合戦の評註がしてある。
- 寶笠翁撰 文化三年序 五卷
- 瑠璃天狗 五册
- 近松物では壽門松(新町の段)、堀山坂(二段目切)、信州川中島合戦(配膳の段)、松風村雨來帶(經殿孫の段)の註解がしてある。
- 近松著作全書 七種 早矢仕有的(九屋五年刊 二册)
- 第一册—近松門左衛門傳 百日曾我 藤八卦桂庵 けいせい反魂香 第二册—本朝三國志 重井尚 堀山坂
- 兼好法師物見車 基盤太平記
- 鏡の權三重帷子(我自刊技書) 南喜山 十六年刊 一册(和装)
- 明治二十二年には(洋装)一册出版さる
- 近松世話浄瑠璃 二十四種(武蔵屋本) 早矢仕民治編 東京 明治二十二年刊
- 近松時代浄瑠璃 二十四種(武蔵屋本) 早矢仕民治編 東京 明治二十二年刊
- 治二十二至二十五年刊
- 早矢仕民治は九番歌舞劇業者早矢仕有的の店員より身を起し、東京神田區宮本町五番地に武蔵屋書閣と號して出版書籍を創めたりで、近松物では明治二十二年天智天皇などの刊行を始めとして、一種又は二、三種を假稱浄瑠璃本一册づつ出して出した。

- り、世話物に限られ、殊に人物の評論をしたもので、「延葛集」は雜誌「早稲田文學」の前身をなし、ついで「早稲田文學」に近松の研究論文が掲載されるやうになつた。明治三十三年刊の「近松の研究」はこの「早稲田文學」から轉載されたものが多い。都の西北早稲田の森にこれ等の諸先輩が、近松研究に盡力されたその昔を想見して感慨深きを覺える。
- 天鼓 平家女護島 抱狩劔本地文學資料) 吉田廣作編 東京 明治二十四年刊 三册
- 校近松時代浄瑠璃 (帝國文庫) 齋庭與三郎校 東京 明治二十五年刊 一册
- 丹波與作評釋 (早稲田文學第二卷) 齋庭與三郎撰 東京 明治二十六年刊 一册
- 近松門左衛門 (稻武文藝) 塚越秀太郎撰 東京 明治二十八年刊 一册
- 評註近松著作集 (日本浄瑠璃叢書) 山田武太郎校註 東京 明治三十年刊 三卷三册
- 校近松世話浄瑠璃 (帝國文庫) 齋庭與三郎校 東京 明治三十年刊 一册
- 校續近松浄瑠璃集 (續帝國文庫) 水谷三十二年刊 一册
- 近松の研究 坪内雄藏、編島梁一郎編 東京 明治三十三年刊 一册
- 近松天の網島 (近代文學評釋) 佐佐政一評釋 東京 明治三十四年刊 一册
- 評釋博多小女郎波枕 山田武太郎撰 五年刊 一册
- 巢林子撰註 (文學叢書) 齋庭與三郎註 東京 明治三十五年刊 一册
- 鏡の權三重帷子 心中天の網島 夕霧阿波の鳴渡、袖珍名妻文庫) 齋庭與三郎校 東京 明治三十六年刊 一册

近松妙文集 小林覺次郎編 東京 明治三十六年刊 一册
 國姓爺合戦 (油珍名著文庫) 關根正直校 東京 明治三十七年刊 一册
 近松門左衛門 (近代文學叢書) 藤井乙年刊 一册
 近松世話淨瑠璃詳解 重井簡・淀野之翁 東京 明治四十年刊 一册
 集林子評釋 曾根崎心中・冥途の飛脚・つれづれ草 藤井乙男撰 東京 明治四十一年刊 一册
 新編 近松傑作全集 及索引 水谷弓彦校 藤岡 近松傑作全集 註 東京 明治四十二年刊 四卷五册
 改訂本あり。
 近松戯曲集 國民文庫刊行會編 東京 明治四十三年刊 三卷三册
 近松脚本集 (廣劇叢書) 高野辰之・南茂 刊 二卷二册 東京 明治四十四年刊
 瓦全遺稿 女殺油地獄註釋 明治四十五年刊 一册
 近松全集 三木竹二・水口瀧陽校 東京 明治三十九・四十年刊 三卷三册
 改訂本あり。
 近松淨瑠璃集 (有朋堂文庫) 忠見慶造校 正二・三年刊 三卷三册 東京 明治四十五・四十六年刊
 世話淨瑠璃 (名作集) (文藝叢書) 齋藤寅三 正三年刊 一册 三册校 東京 明治四十五年刊
 近松傑作集 (五版) 一册 大正六年刊
 近松世話淨瑠璃集成 小林榮子編 東京 大正八年刊 一册
 近松時代淨瑠璃集成 小林榮子編 東京 大正十年刊 一册
 近松戯曲新研究 加藤順三撰 東京 京 大正十一年刊 一册
 近松淨瑠璃選 藤村作編 東京 大正十三年刊 一册

近松門左衛門全集 高野辰之・黒木勲 十一至十三年刊 十卷十册 東京 大正十三年十月特別號、同 國語と國文學 大正十四年八月號等 藤村作編 東京 刊本 正十一年八月號等 藤村作編 大正十一年至十四年刊 十六卷十六册
 大近松全集 木谷正之助校註 東京 大正十一年至十四年刊 十六卷十六册
 近松研究の序篇 前橋春三撰 東京 大正十四年刊 一册
 近松戯曲全集 森田秀雄編 東京 大正十四年刊 一册
 近松淨瑠璃讀本 尾崎久編 大正十四年刊 一册
 標 近松名作選 關根正直註 東京 大正十四年刊 一册
 早稻田文學 明治三十九年四月號、大正十年十一月、近松研究號等 早稻田文學社編 東京 刊本
 國姓爺合戦、百合若大臣野守鏡 (秘珍名著文庫) 關根正直校 大正十五年刊 一册
 詳 近松世物語十種選 吉澤義則・宮田 都 大正十五年刊 一册 一册校註 京
 近松名作集 日本名著全集刊行會編 (部) 東京 大正十五年刊 二卷二册
 鐘の權三重帷子、曾我會稽山、心中天の綱島、國性爺合戦、若波文庫校 東京 昭和二年刊 二册 和田萬吉
 近松歌舞伎狂言集 高野辰之校 東京 昭和二年刊 二卷二册
 近松傑作選集 藤武利三郎編 東京 昭和二年刊 一册
 近松門左衛門集 (近代日本文學大系) 岡 郎編 東京 昭和二年刊 二卷二册
 近松全集 藤井乙男校註、大阪朝日新聞社編 大正十二年刊 十二卷十二册
 近松名作集 近松秋江校註 刊本 一册
 元祿文學辭典 佐藤鶴吉撰 東京 昭和三年刊 一册

改訂本あり。
 近松世話淨瑠璃集 (帝國文庫) 守隨應 治校 東京 昭和三年刊 一册
 近松世話物全集 (國文學名著集) 藤井乙年刊 一册
 近松門左衛門集 (秘珍日本文學叢書) 内 東京 昭和三年刊 一册
 詳全譯 近松傑作集 第一・二卷 若月保治 註 四年刊 二册
 近松世話淨瑠璃選 野村宗朝編 昭和四年刊 一册
 The battles of Kokusenya. (Tales from old Japanese dramas, by Asataro Miyamori. N. Y. and Lond. 1915. p. 339-403.)
 Masterpieces of Chikamatsu the Japanese Shakespear. Tr. by Asataro Miyamori. N. Y. and Lond. 1926.
 Sonezaki shinju. Der Liebestod. Chikamatsu Monzaemon. (Japanische Dramen, von Wolfgang von Gersdorff. Jena. 1926. s. 37-59)
 (右昭和四年まで)
 以上の外に部分的のものは、演劇書類、或は雑誌に論ぜられ、或は中等高等諸學校の教科書中にも採られ、かくて近松文學は益々學者に研究され國民一般の識識に上るものと云ふべし。
 (終)

研究資料